

政務活動費活動報告（視察）

(1) 出席者

夢みらい 小川吉則 矢吹安子 戸崎克司 森田充

(2) 実施日：令和6年10月15日（火）

【1. 調査の目的】

(1) 本市における現状

2025年に開催されるわた SHIGA 輝く国スポ・障スポにおいて
彦根市にある平和堂 HATO スタジアムを会場に開閉会式が開催される

(2) 本市における課題

わた SHIGA 輝く国スポ・障スポにおいて両大会に3万人以上が訪れる
ことが推測される

【2. 調査地選定理由】

(1) 調査項目

SAGA 国スポ 2024 閉会式について

(2) 日時：10月15日(火) 13:00～15:28

佐賀市 SAGA アリーナ

【3. 調査結果】

(1) 内 容

すべての人に、スポーツのチカラを。新しい大会をともに！をテーマに
体育からスポーツに変わる「SAGA2024」。新しい大会は、SAGA アリーナで
フィナーレを迎えました。
すべての人に、スポーツのチカラを届ける。スポーツをする/観る/支える、大会に
関わったすべての人の躍動と感動が SAGA アリーナで再び一つとなりました。
まさに、スポーツ文化の新しい新時代へとつながるクロージングセレモニーでした。

【閉会式の流れ】

12:00 開場

13:00 オープニングプログラム

1. 選手入場

2. プロジェクションパフォーマンス

14:00 式典

1. 開会通告

2. 都道府県旗手入場・フラッグパフォーマンス

3. 成績発表・表彰状授与

4. 天皇杯・皇后杯授与

5. 大会会長あいさつ

6. スポーツ庁長官あいさつ
 7. 佐賀県旗・佐賀市旗儀礼
 8. 大会旗・日本スポーツ協会旗儀礼
 9. 国旗儀礼
 10. 炬火分火・納火
 11. 国スポ旗引継ぎ
 12. 滋賀県旗儀礼
 13. 閉会宣言
 14. 閉式通告
- 15:01 エンディングプログラム
1. 選手団退場
- 15:28 終了
- 15:48 佐賀県選手団解団式

(2) 考察

佐賀国スポの閉会式では、国民体育大会から国民スポーツ大会に名称が変わり新しい大会に変わったと感じました。

簡素化された部分は多くあったがその中でも多くの方々を迎え入れている温かさを感じる大会でもありました。

式典の内容も競技をやり遂げた選手たちの達成感と感動に包まれた瞬間が印象的でした。多くの人が応援し、支え合ってこの大会を盛り上げたことが感じられ、地元の佐賀の温かさや一体感が伝わる素晴らしい閉会式でした。

地域の魅力や歴史、そして佐賀の自然豊かな風景が、さまざまな場面で彩られていたのも印象に残っています。

選手たちの新たな一歩を応援しつつ、また来年の滋賀国スポに向けて期待が膨らむ瞬間でした。

来年の滋賀国スポでは、佐賀国スポで感じた興奮と感動をさらに引き継ぎ、多くの方がまた新しい絆を築けることを願っています。

式典の中で山口佐賀県知事から三日月滋賀県知事に国スポ旗が引き継がれました。滋賀県に来て良かった、滋賀県・彦根市に来て頂いて良かったと思って頂けるように残り1年を切りましたが機運醸成を図っていくことが大切だと考えます。

来年に向けて課題等もありますが滋賀県・彦根市一丸となって乗り切って本番が迎えられるようにそれぞれの立場で推進していきたいです。

政務活動費活動報告（視察）

(1) 出席者（会派名・個人名）

夢みらい 小川吉則 森田充 矢吹安子 戸崎 克司

(2) 実施日：2024.10.16

【1. 調査の目的】

(1) 本市における現状

彦根城を中心とした周辺や、南彦根駅西側よりプロシードアリーナ HIKONE 周辺の都市開発は進められているが、銀座商店街や中央商店街などの賑わいの再生や犬上川より南側の開発が遅れている。

(2) 本市における課題

彦根市全体で各エリアの地域の活性化を図る。
地域力、市民力を結集して街を守り育てていく。

【2. 調査地選定理由】

(1) 調査項目：まちぶらプロジェクト

(2) 選定地1：長崎市

【3. 調査結果】

(1) 内 容

①まちぶらプロジェクトについて

・目的

歴史的な文化や伝統に培われた「まちなか」の賑わいの再生を図るため、5つのエリアの個性や魅力の顕在化などを進めるための整備やソフト事業を市民などと連携しながら進めている。

・対象区域

新大工から浜町を経て、大浦に至るルートを「まちなかの軸」と設定し、軸を中心とした5つのエリアを対象としている。

5つのエリア

新大工エリア

中島川・寺町・丸山エリア

浜町・銀座エリア

館内・新地エリア

東山手・南山手エリア

・計画の構成

- 1) エリアの魅力づくり 各エリアにおいて、まちづくりの方向性を掲げ、各エリアが持つ特色を活かしながら、エリア内の魅力の向上に結びつくような取り組みを進める。
- 2) 軸づくり 「まちなか軸」を基軸として、各エリア間の回遊性を高める環境の整備を行う。また、「陸の玄関口」である長崎駅周辺や、「海の玄関口」である松が枝周辺等の周辺施設との連携軸の整備により「まちなか」への誘導を図る。
- 3) 地域力によるまちづくり 地域や市民自らが企業や行政、NPO等の多様な組織と連携を図りながら、まちを守り、育て、創るために行動し、その集積が「まちなか」を支えるような地域力や市民力を結集する取り組みを進める。

・計画の見直し

「まちぶらプロジェクト」に基づき取り組みを展開していきますが、社会情勢等の変化、あるいは地域との話し合いなどの中で、新たに取り組みとして決定した事項、または、修正が必要になった事項などに関しては、随時、追加修正などを行いながら、地域と共に計画を進めていく。

考 察

・まちぶらプロジェクトの成果

新大工町地区市街地再開発事業や、町家の維持、再現にかかる助成、唐人屋敷跡顕在化事業、まちぶらプロジェクト認定事業などにより、減少傾向であったまちなかの歩行者通行量が、コロナ禍前には増加傾向に転じるなど、一定の成果を上げている。

10年の区切りを迎え、まちぶらプロジェクト認定事業者に対してアンケートを実施したところ、「まちの賑わいづくりに関心を持つ人が増えた」、「行政がサポートしてくれることで活動しやすくなった」など、プロジェクトの効果を感じられる意見が多くあった。

一方で、まちなかの賑わいを実感できている方は過半数に満たず、さらなる賑わいを創出するため、令和5年度には「まちぶらNEXT交流会」を開催し、各エリア内で活動するイベントや事業者の方々が連携し、情報共有を行えるようにしている。

・進化するまちぶらプロジェクト

まちぶらプロジェクトはまちの新しい楽しみ方の提案でもあり、今後の展開としては、10年間の取り組みを継続するとともに、情報発信と多様性のある環境づくりなどを進めながらまちの魅力を磨き、より賑わいのあるまちとなるよう、市民や事業者と協同し、進化するプロジェクトとして取り組みを進めている。また、長崎駅周辺やスタジアムシティの整備が進む中、まちなかの活力を維持していくために、このような集客拠点からまちなかへの人の流れをつくり、市民と行政が連携しながら新たな賑わいの維持・創出を図り、

まちなかに絶えず人がいて、賑わいが生み出される状況を作っている。

まちなかの軸が定められ、トイレ(多目的トイレ、おもてなしトイレ)や休憩所の充実さらに回遊路の整備を行うことで、まちなみに一体感がある。

情報発信の取り組みとして、まちなかエリアのイベント情報をカレンダーにまとめ、長崎市ホームページや SNS を活用し、市民や観光客に向けて周知を行っている。

また、長崎市役所 19 階展望スペースには、まちなかエリアの情報発信コーナーがあり、市民や観光客が楽しめるイベント情報や各エリアの魅力などを発信している。

これは、彦根市においても取り組むことができる参考事例である。

政務活動費活動報告（視察）

(1) 出席者（会派名・個人名）

夢みらい 小川吉則 森田充 戸崎克司 矢吹安子

(2) 実施日：10月16日（水）

【1. 調査の目的】

(1) 本市における現状

彦根城の世界遺産登録に向けて、ユネスコの諮問機関であるイコモスから事前評価申請に対する評価結果が出された。一定の評価を受けその手ごたえを受け止めた一方で課題や指摘事項もあり、今後どのように対処していくかについて、彦根市は、滋賀県と共に文化庁への詳細な協議を行い、国の推薦を受ける準備を進めている。

(2) 本市における課題

イコモスからの指摘では「彦根城単独で大名による統治の仕組みを十分に表現できるのか」や「複数の関連資産(他の国宝天守)とのシリアル推薦の可能性の検討」が挙げられており、彦根城単独で大名統治システムを運用説明するとの方針が決定している中で、課題克服のため機軸を持った理論を持つことが必要で、丁寧な説明をすることが求められている。

【2. 調査地選定理由】

(1) 調査項目

2015年に登録されたシリアル型世界遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製銅、造船、石炭産業」の構成資産に長崎県の端島(はしま)炭鉱があり、特徴的な外観から「軍艦島」と称して名を馳せている。同遺産は、世界遺産登録決定までに多年の紆余曲折があり、イコモスの勧告に対する対処も相当な苦難があったと聞き及ぶ。このことから、現地を訪れ「世界遺産端島炭鉱」の現状と登録決定に至った経緯を見聞する。

(2) 選定地 1：

長崎県長崎市 高島、端島（軍艦島）

【3. 調査結果】

(1) 内 容

長崎港から高速船に乗り、長崎半島西沖合にある「高島」に向かった。高島炭鉱も構成資産の一つであるが、端島炭鉱のガイドの基地にもなっている。その「高島石炭資料館」には軍艦島の模型があり、当時の映像を交え軍艦島の全体説明を受けた。その後、小さな船に乗り換え、端島(軍艦島)に接岸上陸し現地の様子を見学した。

端島炭鉱は、江戸期に佐賀藩が炭鉱脈を発見し小規模ながら採炭を行っており、佐賀藩を幕末の雄藩に押し上げた経緯がある。明治期には殖産興業施策の時流に乗り、1890年に三菱合資会社に経営が移管され、本格的な海底炭鉱として炭出量を飛躍的に増大し、日本の重工業化を支えてきた。

大正期にはすでに3200人が居住し、日本初の鉄筋コンクリート製高層アパートや小中学校、派出所、郵便局、遊技場ができるなど、狭い島内に多くの人を住ませる施策がとられ、昭和35年の人口は5300人に達したと言われている。この時期の人口密度83600人/㎢は、歴代世界一と言われており、「職住近接」「シビルミニマム充足」という当時の政

策課題を解消する理想郷と言われた時期があった。現在の島の景観は、主に大正末期から昭和 30 年代にかけて形成されたものである。

その後のエネルギー革命により急速に石炭産業は影を潜めだし、1974 年 1 月に閉山、同年 4 月には残っていた 2000 余人を強制移住させ、以降無人島になった。

2000 年代になってから近代化遺産としての価値が認められ始め、また、大正から昭和に至る集合住宅の遺構としても注目を集めるようになり、「軍艦島」として観光名所の一つに数えられるようになった。また、世界遺産への登録運動が行われるようになり、2008 年には、「九州・山口の近代化産業遺産群」の一部として世界遺産暫定リストに追加記載されることになる。

このシリアル型世界遺産については、その後構成資産の加除の提言を受けるなど何度かの変遷を経た後、2013 年に「日本の近代化産業遺産群 九州・山口及び関連地域」に変更、修正した推薦書を政府に提出するが、翌年に日本の「推薦候補」とすることが決定された。その後、イコモスの勧告により「明治日本の産業革命遺産 製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業」への名称変更や登録後の条件などが示され、それをクリアした後 2015 年の正式登録に至っているが、保全措置などのモニタリングは継続中である。

現在は、島の一部の区域を対象に、見学区域として立ち入りが認められており、貯炭ベルトコンベアーや堅坑入孔棧橋跡などの石炭産業遺産のほか、1916(大正 5)年建築の 7 階建て鉄筋コンクリート製高層アパートを始めとする多くの生活関連遺産が残されている。多くの施設は老朽化による風化が激しく、「もう 50 年もすると島だけになってしまうかもしれない」との説明があった。

(2) 考察

端島は海底炭鉱の島で、岸壁が細長い島全体を囲い、高層鉄筋アパートが建ち並ぶ外観が軍艦「土佐」に似ていることから「軍艦島」と呼ばれている。炭鉱閉山後の長い眠りについてきた「端島炭鉱」であるが、世界遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製銅、造船、石炭産業」の構成資産として脚光を浴び、往時の石炭産業の繁栄の歴史を現代に伝えている。

端島炭鉱は、上記構成資産の中で唯一生活臭が色濃く漂う遺産である。日本における他の世界遺産を見ても、これほど近現代の庶民の実生活の姿を前面に打ち出しているところはないと思われる。世界遺産登録にあたって、文化庁ではなく経済産業省が登録への支援をしたことが腑に落ちる気がした。彦根城世界遺産のコンセプトである「大名による統治の仕組み」についても、庶民の生活の場が推薦書に書き込まれることになるが、今後の取組にあたって参考となるところがあるやに思った。

石炭の採掘現場は、日本最深の 1000m を超す堅孔が掘られ、急傾斜の坑内を行きかいたながら、常に危険と隣り合わせの厳しい作業の一方で、地上では当時としてはハイカラな生活が享受でき、「ヤマの男」の仕事を支えてきた様子がうかがえる。学校、病院、商店、映画館などが雨にぬれずに行き来でき、土が全くないためアパートの屋上で花や野菜を育てたとの逸話が残されている。

現地を目の当たりにした第一印象は、壮絶な廃墟群と打ち捨てられた過去の産物というものでしかなかったが、日本の近代化産業の礎になった歴史を知るほどに、日本が将来に

わたって残すべき世界遺産としての価値が理解できるようになった。一方で、老朽化による遺産群の風化は今後も進行することが想定され、今後の保存管理をどのようにしていくかについて大きな課題があることが分かった。

以上

記録 矢吹

政務活動費活動報告（視察）

(1) 出席者（会派名・個人名）

彦根市議会 会派 夢みらい

出席者 矢吹安子、森田 充、戸崎克司、小川吉則

(2) 実施日：令和6年10月17日（木曜日） 10：00～12：00

【1. 調査の目的】

(1) 本市における現状

本市では、図書館が1館のみであり北部に偏っている現状がある。また、施設・設備の老朽化が進み、高額な修繕工事が増加している。

(2) 本市における課題

北部館（現有施設）、中央館、中部館（旧ひこね燦ぱれす）、南部サービスステーションの体制としており、旧ひこね燦ぱれすを活用した中部館をまずは整備していく。しかし、財政の問題から、他館の整備は現状予定が見通せていない。

【2. 調査地選定理由】

(1) 調査項目：図書館整備について

(2) 選定地1：長崎県大村市 長崎県立長崎図書館・大村市立図書館
(ミライ ON 図書館)

【3. 調査結果】

(1) 内 容

長崎県と大村市が共同で設置・運営している、長崎県立長崎図書館・大村市立図書館（今後は、「ミライ ON 図書館」という）は

名 称 ミライ ON 図書館（長崎県立長崎図書館・大村市立図書館）

設 立 令和元年10月

基本理念 ミライへつながる出逢いを生み出す知の拠点

目指す図書館像

- 1 知の拠点として県民市民を支える図書館
- 2 全ての県民市民がサービスを利用できる図書館
- 3 県民市民と共に創る図書館
- 4 出逢いにあふれる楽しい図書館
- 5 未来を創造する礎を築く図書館
- 6 故郷の歴史と文化に親しみ、活用及び振興する図書館

特 徴 県立・市立一体型として、施設区分や蔵書区分のない一つの図書館となっている。

工事費は、総額約76億円（県：約48億円、市：約28億円）、土地は大村市が長崎県に無償貸与となっている。駐車場は205台駐車可能で、図書館利用者は実質無料となる。蔵書札数は、約139万冊で九州1位を誇る。貸し出しは、本・雑誌が50冊までで22

日間可能だ。

1階～4階が利用可能であり、こどもしつ（101席）や学習スペース（104席）、グループ学習室（24席）と単に本を借りにきてもらうだけではなく、乳幼児やこどもから小学生、中学生、高校生とまずは図書館に来てもらうことが重要だと考えている。それが、学生のための学習スペースなどに現れている。こどもスペースも、こどもから小学生、中学生とイスやテーブルの大きさ・高さを変え、体格に合わせたものとなっている。

具体的な取り組みの中で特徴的なものとして、

遠隔地返却サービス

協力館への取り寄せ申込みシステム（とりよせくん）

ミライ ON 図書館アプリ などがある。

協力館への取り寄せ申込みシステムや、遠隔地返却サービスを使用すれば、市外や県外の遠隔地でも図書館利用が可能となる。

また、1階の一部スペースでは飲食が可能であり、飲み物やお弁当を持ち込んで過ごす利用者もあるようだ。

(2) 考 察

県と市が共同で設置・運営ということであり、その規模は本市ではなかなか難しいが、中身の工夫は参考になる点が多くあったと感じた。

彦根市立図書館では、スペースの問題もあり学生の自習は禁止となっているが、ミライ ON 図書館は図書館ではあるが単に本を貸し出しているのではなく、学生のための学習スペースがあり、飲食可能なスペースや大村市歴史資料館も併設されており、市民・県民の憩いの場所となっているように感じた。夏場は、クーリングシェルターとなり多くの来館者があったそうである。入館者数も、令和3年度～令和5年度とも約37万人前後の実績となっている。今年度中に来館者数が200万人になる予想だそうだ。1日平均1,300人前後の利用者数となっている。

職員数は、県が30名、市が43名の73名であるが、利用者からは県職員・市職員の区別は分からず、県と市が一体となって運営している様子がわかる。県と市、部署間の連携・連絡がうまくいっているのであろう。

彦根市も単独での図書館設置は財政の問題もあり、なかなか難しいのが現状である。県や他市町との共同設置・運営を検討するのも一案ではないかと考える。

図書館はその街の文化レベルの現れである。規模が大きければ良いのではなく、本市にあった特徴を持った、市民に親しまれる施設にしなければならない。内容や蔵書について広く市民の意見を聞き、市民がどのような図書館を求めているのか、彦根市に相応しい図書館とはどういったものなのか、財政的に厳しく図書館整備がすぐには進まない現状、逆にその中身を検討する良い時間ではないだろうか。図書館整備が進められるようになった時に備え、今はじっくりと彦根市にとって最も良い図書館とは何なのか、考え検討する時期であると考えます。